くまもと県北病院

熊本県玉名市

設計・監理／山下設計
施工／[illegible]

南東側外観

設計主旨

このプロジェクトは国内でも数少ない公立病院と医師会立病院の統合事例である。それぞれの施設の老朽化や狭隘化といった建替えの必要性に加え、労働人口の減少といった地域社会情勢に対応するため、医療資源の集約により効率化や高度化を図るとともに、災害への対応力を強化する計画である。

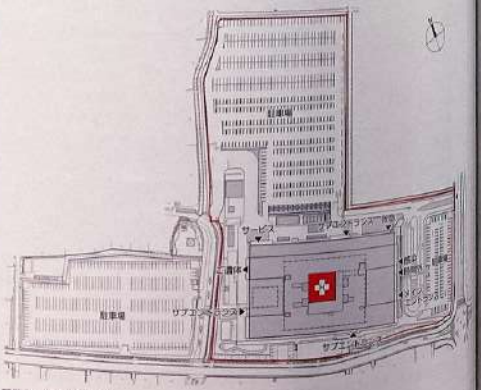
— 基本設計からのデザインビルド方式

基本設計からの設計・施工一括発注というスキームの中で、設計事務所と施工会社で組むJV体制の強みを活かすため、設計初期段階から施工会社の現場担当者や構造設計者が参画することで、施工性や経済性をより強く意識しながら設計を進めるとともに、設計意図を円滑に共有することができた。

— 敷地特性

敷地は熊本県玉名市。古くは<玉杵名(たまきな)>と呼ばれ、その名は日本書紀にも記されている。敷地の程近くにある大坊古墳は、その深い歴史に思いをはせることのできる装飾古墳だ。敷地はそういった歴史性と、九州新幹線新玉名駅から徒歩数分という利便性の高さを併せ持っている。周囲は田園地帯で、戸建住宅や工場などの低層建築が散在している。そのような環境に対し、景観や日影の影響を抑制するため、高さを最小限に抑えた建物ボリュームとしている。また、近隣を流れる菊池川や支流の氾濫による洪水時にも医療機能を継続させるため、建物周囲の地盤面を前面道路よりも約2.0m高くなるようマウンドアップを行った。

南側外観



配置図　縮尺1/4,000

こもれびひろば

— 配置計画

L型の敷地形状に対し、メインアクセスとなる東側県道の車両入口から緩やかなスロープを確保して建物を配置し、駐車場は建物の東と北に配置した。ロータリーは建物正面となる東側に大きくとり、一般車、路線バスやタクシー、健診送迎バスなどがゆとりを持って寄りつける。さらに、南側に薬局を含むアメニティ棟、西側に病児・病後児保育施設が配置されている。道路を挟んで西側の駐車場も合わせ、建物には東西南北4方向からアクセスする計画とした。

— 明確な動線分離を実現するフロア構成

建物1階は外来機能を集約した「ワンフロア外来」を形成し、外来患者にとっての安心・安全を重視した計画としている。2階に供給部門をすべて集約し、3階には手術・HCU・救急病棟といった急性期の治療機能を集約している。

こうしたフロアの明確な特徴づけと、適切に用途区分したエレベーターの配置により、来院者動線、サービス動線、患者搬送動線の分離を実現している。

— 救急専用エレベータによる垂直連携

迅速な患者搬送を追求し、救急専用エレベーターを設け、1階の救急部門、3階の手術・HCU・救急病棟、屋上ヘリポートを直結させた。このエレベーターは、病棟端部のウイングの根元部分に着床させることで、病棟端部に臨時に設けた感染症病床ユニットへの感染患者搬送の動線分離を実現している。

屋上ヘリポートは患者の受け入れと他院への転送の機能を持っており、迅速かつ安全な患者搬送を行うため、待機中にヘリコプターの到着や状況を目視で確認できるようエレベータホールの三面に窓を設けている。

— 「こもれびひろば」を中心とした分かりやすい空間

パブリックエリアは、初めて来訪した来院者にも分かりやすい明快な空間構成とした。1階には東西方向・南北方向に建物内外を結ぶ骨格動線を配し、その交点に3層吹抜の「こもれびひろば」を設け、東と北に分散配置された駐車場から来院者をスムーズに導く。この「こもれびひろば」は抽象化した木漏れ日をデザインした光膜天井を採用し、来院者を柔らかな光で迎え入れる。ここは、総合受付や入退院の待合ホールの機能を持つほか、来院者が行き先を一望できる空間とするため、上階へのエレベーターホールや東西に伸びる外来の「ホスピタルストリート」に直結させている。

— 1フロア4看護単位の病棟フロア

病棟は4つの看護単位を1フロアに収め、低層化による環境影響の抑制や工期短縮といったメリットのほか、スタッフ間の連携強化や諸室の共用によるスペース利用の効率化、火災時の水平避難安全性の向上など、様々な効果を生み出している。

（高橋彰仁／山下設計）

宮本 一平……みやもと いっぺい
1963年静岡県生まれ。1987年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。1991年山下設計入社。現在、同社本社建築設計部門第1設計部部長

高橋 彰仁……たかはし あきひと
1975年宮城県生まれ。2001年東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻修了。同年山下設計入社。現在、同社本社建築設計部門第1設計部チーフアーキテクト